

2024年7月18日

日本古代通史の虚実－奈良時代から平安時代へ－

立命館大学 本郷真紹

(1) 日本古代通史の問題点 その1

恵美押勝は後ろ盾であった光明皇太后が死去すると孤立を深め、孝謙太上天皇が自分の看病に当たった僧道鏡を寵愛して淳仁天皇と対立すると、危機感をつのらせて764(天平宝宇8)年に挙兵したが、太上天王側に先制され亡ぼされた(恵美押勝の乱)。淳仁天皇は廃されて淡路に流され、孝謙太上天皇が重祚して称徳天皇となった。

高等学校教科書『詳説日本史』山川出版社

疑問点その1 「道鏡を寵愛して」とは、どういうことか。

⇒孝謙太上天王と道鏡との関係 俗説を反映するか？

太上天皇出家の意義をどう捉えるか？

(2) 日本古代通史の問題点 その2

道鏡は称徳天皇の支持を得て太政大臣・禪師、さらに法王となって権力を握り、仏教政治を行った。769(神護景雲3)年には、称徳天皇が宇佐天皇が宇佐神宮の神託によって道鏡に皇位をゆずろうとする事件がおこったが、この動きは和気清麻呂らの行動で挫折した。称徳天皇が亡くなると、後ろ盾を失った道鏡は退けられた。つぎの皇位には、藤原百川らがはかかって、長く続いた天武天皇系の皇統にかわって天智天皇の孫である光仁天皇が迎えられた。光仁天皇の時代には、道鏡時代の仏教政治で混乱した律令政治と国家財政の再建がめざされた。

『詳説日本史 日本史B』

疑問点その2 「称徳天皇の支持」とは何か

⇒道鏡が補任された大臣・禪師は、「あに禪師を煩わす俗務をもってせんや」

道鏡が自らその地位を望んだ事を示す史料は見当たらない。

天皇が道鏡に官人的身分と経済保証を与えただけで、具体的な職務を伴わない。

疑問点その3 「仏教政治」とは何か

⇒『詳説日本史 日本史B』の脚注では、西大寺の造営の百万塔の製作など、造寺・造仏の例が指摘されるが、聖武天皇の仏教興隆政策や、のちの院政期の動向は、称徳朝の比ではない。「仏教政治」は道鏡時代の特色ではない。

疑問点その4 光仁天皇の擁立=皇統の交代が目論まれたのか。

⇒聖武天皇の娘・井上内親王を妃にもつことが大きく影響したもの

井上が立后し、皇太子・他戸親王の即位が期される。

(3) 聖武天皇即位に至る経緯

- 宝亀3年(772) 3月 井上皇后厭魅事件 井上廃后
 4月 他戸廃太子
- 同4年(773) 正月 山部親王立太子
 10月 井上・他戸母子卒去
- 同6年より異変続発
- 同8年(777) 11月 光仁天皇罹病
 12月 山部皇太子罹病
 井上内親王の墓を改葬し、墓守設置
- 同9年(778) 正月 山部皇太子の生母。高野新笠に従三位
 同 10月 山部皇太子の病状回復し、伊勢神宮に参詣
 このころ、酒人新王(異母妹)入室
- 同10年(779) 朝原内親王誕生
- 天応元年(781) 4月 光仁天皇讓位、桓武天皇即位
 同母弟・早良親王立太子

(4) 日本古代通史の問題点 その3

桓武天皇は光仁天皇の政策を受け継ぎ、仏教政治の弊害を改め、天皇権力の強化するために、784(延暦3)年に平城京から山背国の長岡京に遷都した。

疑問点その4 「仏教政治の弊害」により。天皇権力は弱体化していたのか?

⇒道鏡の皇嗣問題は天皇権力と関係なく宮都での寺院造営もこれを導くものではない。

桓武天皇即位の意義

革命意識の宣揚

天応元年=辛酉の歳 辛酉革命

※氷河川継の乱

氷上川継：父・塩焼王(天武天皇の孫)母・不破内親王(聖武天皇の娘)

※三方王の厭魅

三方王：妻・弓削女王は天武天皇の孫

※藤原魚名：北家・房前子 光仁天皇の旧臣

桓武天皇の「新皇統」意識

新都造営を構想 光仁天皇陵移転(佐保⇒田原)

長岡遷都(延暦3年、784)

宮都が大和国から山背国へ

藤原種継暗殺事件(延暦4年、785)9月

桓武天皇、平城旧京行幸時に勃発

即座に帰京、遷都反対勢力摘発、早良親王廃太子→逝去

以 上